連載コラム

国際交流員の活動日誌

vol.77

「父親の訪日」 Paternal Visits to Japan

英訳版を見る▶

日本人によく聞かれることがあります。「トニーは日本に住んでいるから、両親の世話はどうするの？」僕は三人兄弟なので、僕だけの負担ではないのですが、日本でできるかぎりのことをします。つまり、定期的に来日してもらい日本で親の世話をします。

父親の訪日はこれまで二度ありました。一度目は、僕が桑折町の外国語指導助手として働いていた任期最後の3カ月間でした。滞在中、父親の歓迎会や僕の送別会が何回も催され、父親はたくさんの町民に出会い、僕と町との絆を目の当たりにしました。そして一緒にアメリカに帰国する飛行機の中で、大学院で勉強した後、再び桑折町に戻る決心を理解してくれました。

二度目の訪日は、桑折町に戻った3年後でした。当時、英会話学校で働いていましたが、父親の滞在中に伊達市の国際交流員になりました。転職と新しい町への引っ越しを父親の支援で乗り切ることができました。かわりに僕が父親の健康面を管理し、滞在中の3カ月で10キロの減量に成功しました。

このように、父親が来日するタイミングで僕の仕事が終わります。三度目も例外ではなく8月に伊達市国際交流員を退任する前に訪日します。退任した後は桑折町に帰りますが、その前に、父親に少しでも伊達の生活を味わってほしいです。父親を見かけたら遠慮なく英語で会話してみてください。日本語は全く話せません！

（トニー）

地域の魅力

ふる里再発見

謎の阿蘭陀（おらんだ）焼

令和５年度第１回企画展
亀岡正元家文書の世界
9/25㈪まで
伊達市保原歴史文化資料館

伊達市保原歴史文化資料館では現在、企画展「亀岡正元家文書の世界」を開催中で、約50点の資料を展示しています。今回はその中から「阿蘭陀焼」の陶器を紹介します。

阿蘭陀焼とは、オランダの東インド会社によって日本に輸入された陶磁器全体の総称で、江戸時代、大名・茶人に珍重されました。

展示品の阿蘭陀焼は、高台付の菊形皿で、直径約20センチ、高さ約4センチです。内面には赤・緑色で草花文（そうかもん）・ツル・小鳥が描かれ、割れた部分は接着剤（にかわ）で修復されています。

桐箱入りで、蓋の表には「菊形皿　阿蘭陀之品」の文字、裏には江戸時代後半の文政年間（1818～1829）に長崎へ学びに出かけた人※が、当地で購入した品であると書かれています。その後、手紙付きで正元の手に渡りました。

しかしこの陶器は、色調・つくり方・焼成などから阿蘭陀焼ではなく、九州産の可能性が高いと考えられています。

真贋はさておき、持ち主が江戸時代後半に長崎まで遊学していたことを考えると、伊達地方は蚕種製造や養蚕業が盛んで、経済的に豊かな豪農たちもいたことがわかる資料といえます。

※伊達地方の農家であったと推察される